

# 学会ニュース

## 目次

・ 第29回大会および第30回大会について	.....1
・ 『百科全書』の電子校訂版構築をめざして 小関武史	.....2
・ 国際シンポジウム「ルソーとフィロゾフ」 小林拓也	.....5
・ 事務局より	.....9

## 第29回大会および第30回大会について

今年度の第29回大会が6月16日（土）、17日（日）に、東京工芸大学（東京中野）で開かれました。開催校責任者は、平山敬二会員でした。今回は6名の会員が自由論題で発表され、また共通論題「『百科全書』共同研究の新地平」（コーディネーター：逸見龍生会員）は4名の会員がご報告くださり、盛会のうちに終わりました。

また、来年度の第30回大会は、2008年6月中旬に大分大学で開かれる予定です。詳細は、次号の学会ニュースにおいてお伝えいたします。

## 『百科全書』の電子校訂版構築をめざして

小関武史（一橋大学）

『百科全書』という膨大なテキストから、読みたい項目（の一部）に行き着くには、それなりの修練が必要である。重要な項目ほど同名の項目が複数存在し（たとえば項目《趣味 GOÛT》）、執筆者が誰かを見極めるには略号を知っていなければならない（ダランベールは D でルソーは S など）、世に「パリ版」と称して出回っているものには信用できないものが少なくない（残念なことにフランス国立図書館が提供している電子画像も真正パリ版ではない）——こうした問題は『百科全書』を参考までに読むだけなら、あまり気に留めるほどのこともない。しかし、研究論文で『百科全書』を利用するのであれば、真正のパリ版のテキストに基づいたうえで、個々の項目に関する従来の研究成果をふまえておく必要がある。われわれが構築しようとしている『百科全書』の電子校訂版は、信頼できる真正テキストを提供することを目指したものである。

もっとも、『百科全書』を電子テキスト化するという計画それ自体は、特に目新しいものではない。すでに Redon 社から DVD-ROM (CD-ROM) が発売されているし、シカゴ大学などによる ARTFL Project がウェブ上の有料サイトで本文を公開している。しかし、それらの電子テキストは、プルースト、ラフ、シュワップなどの優れた研究成果を反映していない。われわれが「電子校訂版」を標榜するのは、この計画が単なる電子テキスト化ではなく、綿密な本文検討の成果を電子媒体で提供するものであるという意思表示である。

この計画の発端は、慶應義塾大学が所蔵する真正のパリ版『百科全書』をデジタルアーカイブ化することであった。数年前より、当時は慶應におられた鷺見洋一中部大学教授および逸見龍生新潟大学准教授が中心となり、写真撮影班や活字分析班と連絡を取りつつ、準備作業が進められていた。そしていよいよ『百科全書』の各項目について、研究上必要なデータを収集することに決まった。われわれはこれを「メタデータ」と呼んでいる。項目をデータと見なせば、データについてのデータに相当するからである。メタデータの収集は単独では不可能な作業であり、大勢の協力が欠かせない。かくして 2006 年の夏に、鷺見教授の呼びかけに応じて二十人を超えるボランティアによる研究班が組織され（協力者の数はさらに増えて三十名を超えている）、『百科全書』第 1 巻のメタデータ収集作業が始まったのである。そのようにして集められたメタデータは、すでに一応の整理がなされ、試験版としてウェブ上で公開するところまで漕ぎ着けた。この場を借りて、協力して下さった方々に御礼申し上げる次第である。

さて、試験版のトップページに行くと、いくつかのメタデータを手がかりに『百科全書』第 1 巻の項目検索ができるようになっている。結果表示ページからは、原版の高解像度デジタル画像を呼び出すこともできる。画像の拡大や他のページへの移動も思うままである。つまり、真正のパリ版『百科全書』をパソコンの画面上で読めるのである。

それでは、メタデータとしてどのようなものがこれまでに収集されたかを、以下に略述する。

- (1) 見出し語：項目の見出しである。項目の途中で執筆者が交替している場合には、見出し語の代わりに冒頭の数語を打ち込んでいる。
- (2) Schwab 番号：Richard N. Schwab が Walter E. Rex と共同で編纂した『百科全書』の目録 Inventory of Diderot's Encyclopédie で振られた通し番号。ただし、参照指示しか含んでいないという理由で Schwab らが無視した項目についても、われわれはデータベースの対象としており、追加番号が発生している。
- (3) 分類符号：分類符号はその項目がどの学問分野に属するかを示しており、ディドロたち編纂者が「百科全書の秩序」を整えるために必要不可欠と考えていた要素である。分類符号および別項目への参照指示によって、『百科全書』の各項目は相互に関連づけられているのである。それほど重要な役割を担っているにもかかわらず、分類符号の付け方は実に恣意的あるいは無秩序で、同一の学問・技術分野を示すのに、複数の名称が使用されていることもある。検索の便を考えると、名称は統一されているのが望ましい。このような作業を「正規化」というが、実際にこの作業に取り組んでみると、細かい問題が続出してかなり厄介であった。
- (4) 開始場所：その名の通り、項目が始まっているページ番号を示している。
- (5) 巻数：現在は第 1 巻のみであるが、将来的には活用頻度の高い検索条件となるだろう。原理的には、巻数と Schwab 番号の組み合わせによって、すべての項目を特定することができる。
- (6) 品詞と性：単独での検索に使用されることはほとんどないと思われる。分類符号と同じく、正規化が不可欠である。
- (7) 長さ：とりあえずシュワップの目録に記載された値をそのまま取り込んだが、将来的には行数で正確な値を出したいと考えている。
- (8) 執筆者：現在は記号のままとなっているが、これらを人名に改める作業が残されている。

以上のようなメタデータをもとにすれば、どのような検索ができるだろうか。たとえば、ディドロが書いた医学項目を調べたいなら、(3)の分類符号を「医学 Médecine」に、(8)の執筆者を「ディドロ (記号は\*)」に、それぞれ指定すればよい。第 1 巻には 15 の項目が条件に合うことが即座に判明する。

上に挙げた八種類のメタデータは、比較的抽出しやすいものであった。将来的には、以下のような複雑なメタデータをも整備したいと考えている。第 1 巻の一部の項目については試験的に収集を済ませたが、全体に拡張するにはまだ多くの課題が残されている。

- (9) 本文項目への参照：(3)の分類符号とともに、百科全書の秩序を支えている。シュワップが目録を作成したときには、項目参照指示の意義が十分に理解されていなかったようである。

- (10) 図版への参照：本文ではなく、図版への参照指示である。
- (11) 本文に明示された典拠情報（標題）：『百科全書』の項目の多くは、何らかの先行文献に基づいて執筆されている。『百科全書』の本文テキストのうち、どれが真に独創的な書き下ろしであるのか、どれが先行文献からの借り物であるのか、その見極めの基礎資料となるのが典拠情報である。
- (12) 本文に明示された典拠情報（著者）：文献の名称は、常に標題で示されるとは限らない。たとえば、「プラトンが言うように」と記されていても、それがプラトンのどの著作かは明らかでない。典拠情報の抽出は非常に難しく、綿密な読みが要求される。
- (13) 引用文：他の文献からの引用文であるが、これも判断に迷うケースが多い。
- (14) 図表：楽譜や数表など、そのままでは活字にしにくいものへの配慮も必要である。ちなみに Redon 版では、図表や特殊活字は無視されている。
- (15) 特殊活字：ギリシア・ラテン文字以外の活字を抽出する。第1巻を見る限り、ヘブライ文字の登場頻度はそれなりに高い。

これらのメタデータが揃えば、検索の幅は飛躍的に広がることだろう。

さて、今年七月にモンペリエで開催された国際18世紀学会において、われわれのチームは「『百科全書』のメタデータの重要性について」というラウンド・テーブルを企画し、現在進行中の計画の概要を紹介した。いちいち名前を挙げることは避けるが、『百科全書』をはじめとする重要文献の電子化という問題に関心を寄せる研究者たちが、われわれの計画に期待を表明してくれた。目指して来た方向に間違いがなかったと、われわれも意を強くした次第である。

もちろん、課題がないわけではない。いや、山積していると言った方がよいだろう。何しろ、われわれは全部で17巻ある『百科全書』の第1巻のメタデータしか採集していない。それも基礎的なメタデータを集めただけで、典拠情報などは網羅されていない。一定の期間内に成果を上げるためには、今まで以上に多くの協力者が必要である。データベースが完成したとして、それを使いやすく提供するにはどうすればよいかについても、細部がまだ詰められていない。そもそも、データベースを誰が管理するかも未解決である。その他、この紙面では紹介しきれない細々とした問題が残されている。

課題にばかり目を向けていると気力も萎えてくるが、ともかくよい方向に向けて第一歩を踏み出したことは事実である。全体計画を実現するためには、『百科全書』それ自体を完成させたのと同じくらいの、研究者間の連携が必要となる。繰り返しになるが、大勢の皆さんのご協力をお願いしたい。

## 国際シンポジウム「ルソーとフィロゾフ」

小林拓也（ヌーシャテル大学）

2007年6月28日から7月1日まで、国際シンポジウム「ルソーとフィロゾフ」がリヨン第2大学で開催された。25件の個別報告にオープニングとクロージングの特別講演が加わるという構成であり、フランスでは2002年パリでの「ルソーの書簡を読む」以来の本格的ルソー学会であった。

全体の運営は北米ルソー協会（Rousseau Association: <http://www.rousseauassociation.org>）によって行われた。同協会はアメリカとカナダを中心とする60名ほどの専門家によって組織される団体であり、1979年の設立以来2年ごとに研究報告会を開催している。今回が初のヨーロッパ進出となるが、実現に際してはリヨン第2大学教授のM. オディー氏の貢献が大きかったようである。ちなみに次回は2009年、カリフォルニア大学デイヴィス校が候補地となっている。

「国際シンポジウム」と銘打たれただけあり、アメリカ、カナダ、イギリス、フランス、スイス、ベルギー、日本、ノルウェー、スペイン、トルコなどから50名ほどの参加があった。発表者中のビッグネームとしては、グルノーブル第3大学のJ.-F. ペラン氏、ルソーの化学関連著作の専門家B. ベルナルディ氏、英語版『ルソー全集』（1990-）の総責任者Ch. ケリー氏、国際モンテスキュー協会会長のC. ヴォルピラック＝オージェ女史などを挙げることができる。日本からは甲南大学の川合清隆氏と筆者が発表者として参加した。川合氏は問題の的確な整理や新たな地平を導入する発言を頻繁に行い、筆者はリヨン周辺のルソーゆかりの地を記した案内図を配布するとともに、年頭にリヨン植物園で発見したルソー直筆の記述を含む植物標本15点の展示会を実施し、報告以外でも大いに存在感を示した。

特別講演を含め、発表言語はフランス語15件、英語12件であった。「霊魂」や「感情」等、哲学系の問題を扱う報告が多かったが、音楽や植物学の分野も取り上げられた。プログラムはWEB上で公開されており（<http://lire.ish-lyon.cnrs.fr/spip.php?article258>）、また、論文集がヴォルテール財団から2009年を目安に出版される予定なので、各報告の紹介とは別の視点から4日間を振り返りたい。2012年はルソー生誕300年であり、日本でも記念行事開催の機運が高まりつつある。その際の活動方針や準備の参考となり得る事項を中心に見て行くことにする。

まず初日の歓迎レセプションでは、気になる2012年の準備状況についてヴォルテール記念館のF. ジャコブ氏から説明があった。氏によれば、現在ジュネーヴ市文化局が中心となって記念イベントを公募しているそうである。そのために立ち上げられたWEBサイト（<http://www.ville-ge.ch/culture/rousseau>）を覗いてみると、学術的な展示会やシンポ

ジウムだけでなく、音楽作品の上演など様々な計画が検討されていることが分かる。2011年は『新エロイーズ』、2012年は『社会契約論』と『エミール』出版250年ということもあり、早くも来年から実行される企画もあるようだ。パリとヴェネチアも中核地として位置づけられており、今後これら3都市を中心に行事は展開されて行くとのことであった。また、最近では東南アジアや南米など、これまで専門家の少なかった地域でもルソーや18世紀への関心が高まりつつあるとの見解も示された。事実、例えばブラジルでは2007年8月に本格的なルソー学会が開催されたそうである。昨年退官されたジュネーヴ大学のA. グロリシャール氏の博士課程準備ゼミでも中国や東欧諸国からの留学生が目立ち、さながら外国人向けフランス語講座といった雰囲気であったことから、今後こうした「新興国」の研究動向も無視できなくなっていくのであろう。ここは是非、2012年までにインパクトのある企画を実現し、我が国の歴史あるルソー研究の存在感を示しておきたいところである。

2日目正午には筆者を含めた7名の若手研究者が集められ、リヨン大学の博士課程学生4名との昼食会が行われた。自己紹介から始まり、しばらくは学問上の情報交換などが続いたが、ホスト役のオディー氏が、フランス語を母語としないながら如何にして現在の地位に辿り着いたかを語り出すと参加者の緊張がとけ、生活費の工面や就職活動、指導教授との関係など、若手には切実な話題が堰を切ったように飛び出した。彼らの抱える問題は、そのまま各国の研究事情を明らかにしているように思われた。ここで目立ったのは、フランスやベルギーなどでの就職難、そしてアメリカの大学や研究所、及びヴォルテール財団の活力と行動力であった。フランスでは主に理系で海外への頭脳流出が問題となっているようだが、文系、しかも看板である文学や哲学の分野でも同様の現象が起こることは時間の問題なのかもしれない。いずれにせよ、休憩時間などでの個別の出会いや会話より、今回のように半ば強制的に仲間意識を持たされ、司会役によって巧みに進行される場の方が本音が出やすく、短時間の内に問題の核心が浮き彫りとなるように感じられた。今後様々な機会でのこのような交流の場が提供されることを期待したい。

3日目、ペラン氏のクロージング講演が終了すると、「我が家でアペリティフをどうぞ」というオディー氏からの嬉しい誘いがあった。25名ほどでローヌ河沿いを散策しつつ、県庁近くの氏のアパートマンへ向かった。広く落ち着いたリビングには程よく椅子やテーブルが配置され、さながら18世紀のサロンといった雰囲気であった。3日目ともなるとアメリカ流の飾り気のなさが浸透したせいも、全員がファーストネームで呼び合い、人称代名詞も「tu」が用いられ、ざっくばらんな会話が続いた。特にオディー氏の蔵書を手に取りながら行われた、「この論文は素晴らしい」、「この出版社は最近おかしい」といった即興の品評会は、シンポジウム中のやり取り以上に研究の現状を明らかにするものであった。筆者はR. トゥルーソン氏の秘蔵っ子と言われるブリュッセル自由大学のCh. ヴァン・スタン、カナダのラヴァル大学が作成しているルソーに関するWEBサイト

(<http://agora.qc.ca/thematiques/rousseau.nsf>) の運営委員C. ミノーの2人と意気投合して様々な意見交換を行ったが、彼らの研究への情熱や通説に囚われないルソー観を聞

いていると、フランス、スイスといったこれまでの中心以外の国や地域で今後新しい動きが現れて来るような予感を覚えた。

最終日はシャンベリー方面への遠足に充てられた。レ・シャルメット、ヴァランス夫人の住居、彼女の墓を訪れたが、写真集『ルソーの秘密の庭園』(1989)の筆者として知られるシャンベリー美術・歴史博物館のM. ヴェドリーヌ女史が同行していたため、地元研究者ならではの詳細な案内を聞く幸運に恵まれた。リヨンーシャンベリー間にはブルゴワンやモンカン、レ・ゼシエルなどルソーゆかりの地が多々あるが、欲張らず上記3箇所に限った訪問であったため、ゆったりと各地の雰囲気を楽しむことができた。特にレ・シャルメットでは庭園内でのピクニックの時間が設けられ、美しい山々を眺めながら忘れがたいひと時を過ごすことができた。日曜日ということもあり、一行の見学中も多くの観光客が敷地内を散策していたが、このような光景を眺めていると、ルソーゆかりの地はその大半が観光地や保養地としても第一級の場所であることに改めて気付かされた。彼自身の嘆きに反し、少なくとも住居や環境に関しては、ルソーは大半の同時代人より遥かに恵まれていたと言っただけではないだろうか。イギリス人がよく口にする、「フランスは素晴らしい。フランス人がいなければの話だが…」というフレーズが思い出された。大学前で解散となったが、その後国際18世紀学会の行われるモンペリエへ向かったのはごく数人であった。著名な専門家の不在を見ても明らかのように、積極的参加を目指すディドロ研究者とは対照的に、ルソー研究者の間でのこの学会の位置づけは微妙なものようである。「憎しみ合う兄弟」ルソーとディドロの性格や感性の違いが各々の研究者によって体現されているかのように感じてしまうのは筆者だけであろうか。

以上、学会動向や運営に関する事項を中心に紹介して来たが、最後に大会中頻繁に尋ねられた質問について触れておきたい。それは、「日本にルソー研究会はあるのか?」というものである。研究の歴史や専門家の数ではアメリカと同等かそれ以上であるにも拘らず、「Non/No」と答えなければならないのは残念であり、肩身の狭い思いであった。生誕300年という節目は目前であるし、今後世界的な勢力図の変化の中で取り残されて行かないためにも、本格的な「ルソー学会」を設立し、海外へ向けた情報発信を行うべき時が来ているのではないだろうか。設立に際しては、北米ルソー協会の以下3点の試みが参考になるだろう。

#### 1) 複数言語での運営

今回のシンポジウムでは、事前のメール連絡やレジュメ、会場の案内表示に至るまで、全ての文書は英仏2ヶ国語表記であった。また、質疑応答でも質問は英語、回答はフランス語といったケースが頻繁にあった。英語をベースとする団体ですらこのような労をとっているのであるから、日本の団体が世界的に認知されるためには、日本語と並行して少なくともフランス語での運営を徹底させる必要があるだろう。

## 2) 海外でのシンポジウム開催

北米ルソー協会主催の大会は全ての研究者に開かれており、以前からフランスをはじめとする海外からの参加者が多かったようである。上記のような徹底した2ヶ国語運営の結果であろう。今回のようなヨーロッパでのシンポジウム開催については、海外会員の獲得や知名度の向上といった点で計り知れない利益をもたらしたはずである。幸い、我が国にはパリの日本文化会館などの在外文化施設が幾つかある。初回からそうした場所で学会を企画し、強いインパクトを与える戦略も検討できるだろう。

## 3) ヴォルテール財団との協力

北米ルソー協会の大会論文集は、2001年よりヴォルテール財団から出版されている。財団による査読も行われるため、全ての報告が採用される保障はなくなったわけであるが、それが本来の姿とも言えるのではないだろうか。たとえフランス語で出版しパリの国立図書館などへ寄贈しても、会員や知人以外に読まれることは殆どないというのが多くの日本の学会誌の現状であろう。クリアすべき問題は多いだろうが、ヴォルテール財団との提携を実現させ、世界的に認知される論文集や専門誌を監修する団体を目指すべきであろう。

2012年へのカウントダウンは既に始まっている。資金調達や人間関係など多くのハードルがあるだろうが、これまでの我が国の研究業績に見合った学会が一日も早く設立され、世界レベルでの活動が行われることを期待したい。



## 事務局より

### 会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、本年度までの会費未納入の方へ振り込み用紙を同封させていただきます。前回の学会ニュースでもお知らせ致しましたが、会費の納付率が相変わらず極めて悪い状況です。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

### 新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

### 新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

### 入退会・会員移動（敬称略、50音順）

#### 新入会員

岩井茂昭 研究課題：18～19世紀の芸術有機体論の系譜

大塚雄太 研究課題：18世紀ドイツ啓蒙思想

小林亜子

鈴木良隆 研究課題：18世紀ヨーロッパにおける東洋風物産の産業化

藤井俊之 研究課題：啓蒙主義と演劇

#### 退会会員

磯崎史代 小野亮祐 木崎喜代治 佐藤朋之 永井義雄 中尾雪絵 浜林正夫 林善之  
坂昌樹（逝去） 柳春生 山口俊治 山本宏

#### メーリングリスト

日本18世紀学会では、学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。

幹事会メンバー：

安西信一（常任幹事、年報担当）、井田尚（常任幹事）、伊東貴之（常任幹事）、岩佐愛（常任幹事、年報・書評担当）、王寺賢太、小田部胤久（代表幹事）、笠原賢介（常任幹事、会計担当）、金沢美知子（常任幹事）、川島慶子、小穴晶子（常任幹事、年報・業績欄担当）、高橋博巳（東アジア交流担当）、寺田元一、長尾伸一、馬場朗（常任幹事、庶務・学会ニュース担当）、堀田誠三、増田真

会計監査：中島ひかる、濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第55号 2007年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 小田部 胤久

事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 美学芸術学研究室内

e-mail: [voltaire18th@yahoo.co.jp](mailto:voltaire18th@yahoo.co.jp)

fax: 03-5841-8958

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>